

昨年度の多摩区・3大
学連携事業の一環とし
て、大矢根淳文学部教授
が中心となり、中野島地区における
災害・防災に関する事業
に取り組んだ報告書がこ
のほど完成し、5月7日、
多摩区役所で、皆川敏明
多摩区長に手渡した。

この事業は1月からス
タート。大矢根教授、大
学院文学部研究科社会学専
攻の横山順一さん、吉川
忠寛防災都市計画研究所
長が中心となり、同町会
の自主防災組織メンバー
の方々と地域防災活動に
ついてのワークショップ
を重ねてきた。「防災の
視点」をもって、実際に
まちを歩くフィールドワ
ークを2月末に実施し、
そこで感じとった「資
源」「危険」「その両方に
なるもの」の情報を
巨大な地図上に書き込ん



▲完成した報告書



▲中野島町会防災マップ

熱い思いが、
今回の成果に
つながりまし
た。皆さんと
常に確認しあ
っていたのは、
防災マップを
つくることと
は、目的で
はなく、あく
まで手段であ
り、ひとつの
過程に過ぎな
いということ
です。実際に
まち歩きを行
い、問題点を

防災マップづくりで地域貢献

だ。防災マップ作成から
得られた情報をもとに、
高層マンション地区、商
店街、小学校界隈、木造
(老朽)家屋密集地区など
のエリアごとに「ライフ
ラインの地中埋設化」、
「人的資源の再発見・組
織化」、「児童の引き渡し
訓練の実施」、「町会と福
祉施設の提携」などの提
案をしている。報告書に
は、ワークショップでの
話し合いや、マップ完成
までのプロセスが詳細に
記されている。

☆被災は

日常生活の通信簿

大矢根教授は、「被災
は日常生活の通信簿」と
いう言葉がありますが、
日常生活のなかで、常に
自分の周囲を見つめ、地
域の方たちとの関係性に
愛情をもつことが大切で
す。中野島地区には、町
会をベースとして自主防
災組織を超えて活動する
防災委員会があるという
大きな特徴があり、将来
の被災を防ぎたいという

文・大矢根淳教授と院生の横山順一さん 「理想のまちづくりへの一歩」



▲報告書を手渡す大矢根教授(左)。左端は横山さん

皆川区長は、同席した
中野島町会の方々の感想
に耳を傾けながら、「安
全・安心なまちづくり
は、多摩区の重点課題の
ひとつであり、この報告
書を有効に活用させてい
ただきたい」と話した。

発見したら、その解決策
を考え、関係機関に交渉
するといった行動を起こ
す。防災を特別なことと
考えず、たとえば古くな
って色あせた消火栓マー
クの塗り直しなどは、子
ども会の行事に組み込ん
で、小さいころから意識
の中に「防災」を植えつ
けるなど、マップづくり
は、思い描く理想のまち
づくりのための、第一歩
です。この報告書を読め
ば、どこでも、誰でも防
災マップづくりのプログ
ラムを再現・実施できる
ように構成してあります
ので、モデルケースが広
がっていくことを願って
います。ただ、防災は、
長い視点で考えていかな
ければならないので、引
き続き、町会の方々と一
緒に取り組んでいきたい
と考えています」と報告
した。



写真提供：(株)ゲッティ コミュニケーションズ

「インターシッパ」から、将来の目標が見えた!

西牟田 充恵さん
(経営3)

石崎徹ゼミに所属する西
牟田充恵さん(経営3)は、
「春期休暇中を活用して、
将来につながる活動をした
い」と広告代理店のゲッテ
ィコミュニケーションズで
約2カ月間のインターシッ
ップを行った。

営業に同行したり、企画
会議に出席したりするなど
の貴重な経験をしたほか、
同社が主催した林海監督
の映画「THE CODE
/暗号」プロモーションア
イデアコンテストで約30
0人の大学生の応募者の中
から準グランプリという栄
冠を獲得し写真、表彰式で
はプレゼンテーションも行
い、その様子は多くのメデ
ィアに掲載された。コンテ
ストは、若い世代が映画館
に足を運んでくれるような
アイデアを競うもので、西
牟田さんは「数字」をキー
ワードに宝くじに着目した
「ドリームプロモーション」
を考えた。

「興味があることに一歩
踏み出したことで、次のス
テージが広がりました。本
格的に就職活動をスタート
させる前に、もっと社会や
企業のことを勉強し、今回
の経験から、自分に不足し
ていると実感した情報収集
能力を高めたい」と瞳を輝
かせる。

eスポーツ

国際大会に出場

岡本 脩太朗さん
(ネット情報3)

高校時代から得意だった
ゲームの腕を買われ、20
08年秋にシンガポールで
開催された第2回「eスポ
ーツ国際大会」に日本代表
として出場した岡本脩太朗
さん(ネット情報3)。

eスポーツ(注※)は、
日本ではあまり馴染みがな
いが、韓国、中国、ロシア
では国が文化活動として支
援するほどの人気を誇る。

プロジェクトとサークル活動に全力投球

日本は団体戦で8カ国中
5位だったが、個人戦は岡
本さんのチームメイトが優
優勝を挙げた。「団体戦は、
周囲の状況を見極めなが
ら、反射神経を働かせ、瞬
間的な判断が必要でした。
集中力と瞬発力が求めら
れ、特別な緊張感を味わえ
ることも大きな経験でし
た」と振り返る。

大会後は学業とサークル
活動に重点を置いている。
コンテンツデザインコース
に所属し、3年次必修科目
「プロジェクト」は、上平
崇(准教授)の指導のもと、
「遊びにおける新しいイン
タラクションデザイン」
(仮題)に取り組んでい
はない特徴。

所属の軽音楽研究会では
ドラムを担当。「約50人の
部員は、さまざまな学部な
ので、違った視点や、いろ
いろな個性に触れることが
できます」と言う。

学部で学んでいる知識と
技術を生かし、コンテンツ
のポスターデザインも担
当。「軽音」は、6月末の黒
門祭でライブを披露する。

※electronic sports
の略。コンピュータゲーム
(特に対戦型)をスポーツ
として楽しむ。審判が存在
するも他のゲーム大会に
はない特徴。

環境地理学専攻・刈谷クラス



環境地理学専攻の1年次生は2クラスに
分かれ、地理学基礎ゼミナーを全員が履修
する。

このうち刈谷愛彦准教授担当クラスの今
年度の共通学習テーマは「多摩丘陵」。
同クラスでは5月6日、誕生から30数年
が経過し、少子高齢化など固有の社会問題
を抱えている多摩ニュータウン西部を訪
れ、住宅地・商用地の開発と軌跡をはじ
め、近くに残る「谷戸」の自然や暮らしを
観察する巡検(野外実習)を行った。写真。

小雨が降る中、初めて野外での調査を行
った学生たちからは「丘の上から見た学校
が廃校になっていることを知り、少子化問
題を自分の目を通して実感した」、「建物や
道路から、ニュータウンの歴史、地域が抱
える課題がわかった」、「調査」という目
線で歩くと、ふだんは気付かないことも見
えてくる」といった感想が聞かれた。

1年次生のフィールドリサーチ体験

文学部人文科学科の1年次生が、初めて体験するフィールドリサ
ーチの様子を紹介する。

社会学専攻の1年次生が、入学後初めて
フィールドワークや発表を体験する恒例の
「基礎ゼミナール合同セミナー」が5月
16、17の両日、行われた。

初日、学生91人が所属の基礎ゼミ8グル
ープに分かれ、小田急線沿線の産業の動向
や歴史、地域コミュニティ、人々の生活
などテーマを決めて、まち歩き。精神的
にインタビューを行った。その後、伊勢原
ゼミナーハウスで調査の模様を分析、レポ
ートにまとめた。

多摩市職員の協力で多摩ニュータウンの
歴史や住民の声を聞いた宇都築ゼミ、「向
ヶ丘遊園」の隆盛と衰退の歴史を調査し、
引き続きの調査への意欲を感じ取った大矢
根淳ゼミなどそれぞれのグループが調査結
果を発表した。

「インタビュは数をこなすうちに自信
がついたようだ。一連の作業を通じ社会調
査の学び方を理解し、1年次生同士のコミ
ュニケーションも深まった」(合宿担当の
樋口博美准教授)など、充実した2日間だ
った。

社会学専攻生

小田急線沿線で 8グループ

「調査」初体験



社会学専攻の1年次生が、入学後初めて
フィールドワークや発表を体験する恒例の
「基礎ゼミナール合同セミナー」が5月
16、17の両日、行われた。

初日、学生91人が所属の基礎ゼミ8グル
ープに分かれ、小田急線沿線の産業の動向
や歴史、地域コミュニティ、人々の生活
などテーマを決めて、まち歩き。精神的
にインタビューを行った。その後、伊勢原
ゼミナーハウスで調査の模様を分析、レポ
ートにまとめた。

多摩市職員の協力で多摩ニュータウンの
歴史や住民の声を聞いた宇都築ゼミ、「向
ヶ丘遊園」の隆盛と衰退の歴史を調査し、
引き続きの調査への意欲を感じ取った大矢
根淳ゼミなどそれぞれのグループが調査結
果を発表した。

「インタビュは数をこなすうちに自信
がついたようだ。一連の作業を通じ社会調
査の学び方を理解し、1年次生同士のコミ
ュニケーションも深まった」(合宿担当の
樋口博美准教授)など、充実した2日間だ
った。